平成20年度

子どもにとってよりよい支援をつなぐために
～通常の学級でできる指導・支援事例集～
PART Ⅱ

徳島市教育委員会

目　　次

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　指導・支援の事例

・時間割が連絡帳に写せない子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

・ひらがなを書くのが苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

・漢字を書くのが苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

・毛筆書写の準備・片づけが苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・　8

・時計をよむのが苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０

・算数（十進法）が苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２

・図工（図画）が苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１４

・家庭科（裁縫）が苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６

・板書が見えにくい子どもには？（視覚的な解決）・・・・・・・・・・・・・　１８

・たくさんの課題をするのが苦手な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・　２０

・自分からやろうとしない子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２

・自分の思い通りにならないと攻撃的になる子どもには？・・・・・・・・・・　２４

・視覚的な支援が有効な子どもには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２６

Ⅲ　通級指導教室

・通級指導教室（わかば）と在籍学級との連携・・・・・・・・・・・・・・・　２８

・通級指導教室（まなび）と保護者との連携・・・・・・・・・・・・・・・・　３０

Ⅳ　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３２

Ⅰ　はじめに

平成１９年４月に改正学校教育法が施行され、特別支援教育が本格実施されて２年目である。それに先立ち、平成１８年度から通常の学級に在籍しながら、障害に応じた特別な指導を行う通級指導教室の対象となる障害種別が拡大され、自閉症、学習障害（ＬＤ）、注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）等も通級の対象となった。

通級指導教室は、個々の障害の克服・改善と環境への適応を目的に、通級する子どもの日常生活の場である家庭、学校での適応を図るために特性に応じた指導を行う場である。その専門的な指導が、日常生活の場で生かされるためには、子どもへの指導とともに在籍学級の担任および保護者との連携が、たいへん重要である。

徳島市では、現在、小学校には言語障害対象の通級指導教室が４教室、自閉症対象が１教室、ＬＤ対象が１教室、ＬＤ・ＡＤＨＤ対象が１教室、中学校には自閉症・ＬＤ対象が１教室設置されている。

また、平成１７年度より徳島市特別支援連携協議会を設置し、保健、医療、福祉、労働、教育等の関係部局、特別支援学校、大学、療育機関等の関係者と連携しながら、ＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症等を含めた障害のある子どもに対する教育支援体制の整備を促進するとともに、一人一人の教育的ニーズを把握して適切な指導および必要な支援を行う特別支援教育の充実に努めてきた。また、徳島市特別支援連携協議会には、特別支援教育調査研究ワーキングを設け、実践的な研究に取り組んでいる。

平成１９年度の徳島市特別支援教育調査研究ワーキングでは、小中学校の通常の学級における特別支援教育に視点をあてた学級経営や、分かりやすい授業の工夫改善について実践研究を行い、「子どもにとってよりよい支援をつなぐために～通常の学級でできる指導・支援事例集～」を作成した。今年度は、「通常の学級における生活や学習のつまずきに対する指導や支援のヒント」を提案するとともに「通級指導教室と在籍学級および保護者との連携」について報告する。

本ワーキングにおける基本的な考え方は、次のとおりである。

（１）徳島市特別支援連携協議会の審議方針に基づくこと

（２）文部科学省からの通知、報告書並びに「小・中学校におけるＬＤ（学習障害）、ＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育的支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」をもとにすること

（３）徳島県教育委員会作成の啓発パンフレット、指導資料を参考にすること

（４）作成上の留意点

①　現状の中でできる環境整備、配慮、支援を提案すること

②　教職員の研修等に活用できる内容であること

③　徳島市特別支援教育を推進する上での課題を提起すること

④　個人情報の保護に十分留意すること

Ⅱ　指導・支援の事例

時間割が連絡帳に写せない子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・朝、書くことに決めた時間割。教師が黒板に書いてある時間割を、ノートに写すことができない。国語や算数の時間の視写は、ある程度できるか、または苦手である。

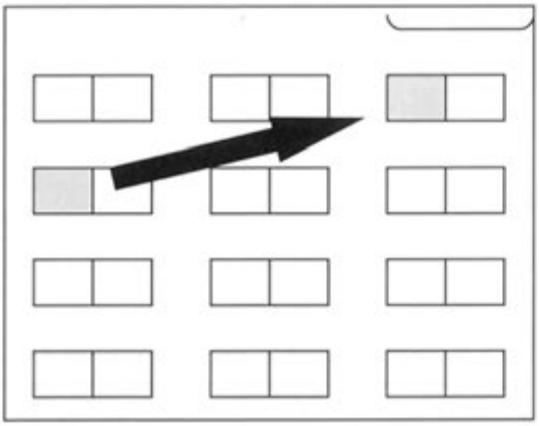
＜考えられる要因＞

・座席から黒板が見えにくい。
・線と文字の区別がつきづらい（時間割はグラフ黒板に書かれていた）。
・黒板に書いてある文字などが、おぼえられない。
・視線の動かし方がぎこちない。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

座席の位置をかえる



← 予定黒板

※写すことが書いてある黒板に近い席にかえる。

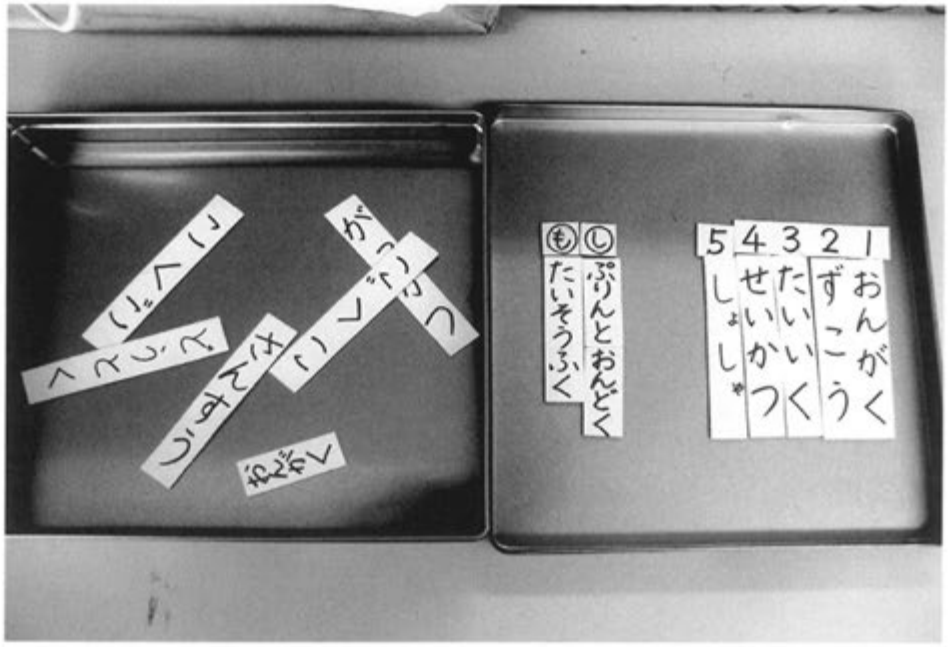
アイディア2

書く黒板をかえる

＜グラフ黒板＞　　＜罫線のない黒板、書き込むノートのレイアウトに近い書き方＞

アイディア3

机の上に時間割表をもってくる（磁石ボードを使う）



※これでも難しい場合は、ひとつひとつはずし、
ノートの上、書く欄のすぐ横に置いて、写す。

＜取り組みを通して＞

・座席の位置をかえるだけで、写せるようになった子がいる。遠くのものだと見づらい、黒板までが遠いとほかに集中をとぎれさせるものがたくさんあるので書けなかった等の原因が考えられる。

・グラフ黒板に書いていたのを黒板にかえると、写せるようになった子がいる。余計な刺激（ここでは罫線）がなくなったのがよかったようだ。

・スクールカウンセラーの先生や巡回相談の先生から、見方の得意・不得意があることを教わった。視線の動かし方について、上下の動きが得意な子ども、左右の動きが得意な子どもがいる。

・黒板の文字がノートに写せなくても、すぐ隣に置くと写せる子がいる。

・マグネット式ホワイトボードに教科名等を貼り付けて利用すると、写せるようになった子がいる。このボードはノート（連絡帳）の左にも右にも上にも置けるので、その子の写しやすい位置に置くことができる。

・何らかの事情でその時間内に写せなかった子にも効果があった。

・技能的には大丈夫だが、時間内に取りかかれない子、やり終えることができない子については、別の手だてが必要である。

ひらがなを書くのが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・教科書を読むのが苦手である。
・似たようなひらがなを見誤ることが多い。
・文字の特徴に無頓着で雑にさっさと書いてしまう。

＜考えられる要因＞

・文字を書く回数が少ない。
・視覚入力の時点で歪んで見える。
・手先が不器用である。
・形の認識ができていない。

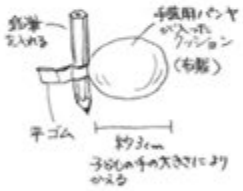
＜取り組みの実際＞

アイディア１

筆圧加減、字形を整えるための工夫

・トレーシングペーパー裏側に鏡文字（手本）を書いておく。

・トレーシングペーパー表側からなぞらせる。
　※筆圧が弱かったり、手本通りの形でなかったりしたらノートに字が転写されない。
　※筆圧のみの練習であればカーボン紙での練習も有効である。
・下じきの代わりにサンドペーパー１５０番を使う。
　※サンドペーパーの抵抗により思うように線が引けない。ていねいにゆっくり書く練習に有効である。
・教師が赤鉛筆でうすく手本を書いておく。
　※手本の赤鉛筆の濃さを加減できるので、なぞった後に赤い色が残らず、本人が仕上げたようにできる。
　※最後のマスは空けておき、自分で仕上げたという気持ちを持たせる事が大切である。
・鉛筆の持ち方を助けるために「おたすけボール」を使う。



＜宍喰小学校　戎居多佳子先生の発案の「おたすけボール」＞

※ゴムに鉛筆を通し、丸い部分をにぎりこませる。
※紙から手がういていないかどうか確認する。

アイディア2

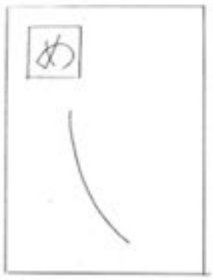
学習していく順番の工夫

・なぞる
・読む
・言葉と絵カードのマッチング
・虫食いの字を見て書く
・絵を見て書く
・徹底的に一音一文字を聞いて書く。

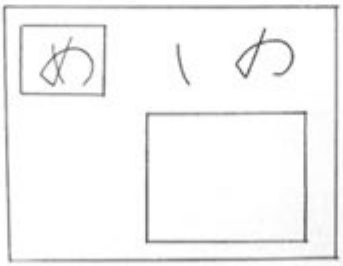
＜虫食いの字＞

アイディア3

ゲーム化で楽しく覚えられる工夫



＜続きを書こう＞



＜ひらがなパズル＞

※厚紙を切りぬき、ひらがな文字を構成する形態要素のパーツを作る。パーツを使って完成させる。
※いろいろな色の紙ねん土でひもを作っておき、組み立てていくのも楽しい。

参考文献　『教室でできる特別支援教育のアイデア１７２　小学校編』
図書文化　　月森久江　編集

・絵かき歌感覚で、はねやはらい、点画の方向などを楽しく覚える

・パソコンでフラッシュカード

＜取り組みを通して＞

・基本的なことだが、書く前に「削った鉛筆」「したじき」という合いことばを言うだけで、字は書きやすく、きれいになる。
・筆圧の加減がうまくできるようになり、読みやすい字が書けるようになった。
・ますの中に字がおさまるようになった。
・とめ、はね、おれ等に注意が向くようになった。
・自分の名前がうまく書けるようになった。

漢字を書くのが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・漢字を写して書くことが苦手である。
・書けるが、筆順がばらばらである。
・字形が整わない。
・写して書くことができるが、覚えられない。

＜考えられる要因＞

・見て書くまで覚えていられない。
・図形のように認識していて、「画」の意識がない。
・部分に分解できない。
・見ないで書くことに慣れていない。
・手指の動きが不器用である。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

筆順を唱えながら、指で机に書く

※ノートに何回も書くのが苦手な子でも、抵抗なく反復練習できる。

※腕を大きく動かし、空中に文字を書く方法もある。

アイディア2

部分に分解することを教える

例）

曜 ➡ 日 ＋ ヨ × 2 ＋ 隹

アイディア3

漢字九九カードを利用する

・『漢字九九カード○年』学習研究社

【安】の文字を「**ウ**ちの　**女**子は　**安**全だ」（３年から引用）のように語呂合わせで覚える

アイディア4

書籍を参考にする

・『教室でできる特別支援教育のアイデア１７２小学校編』　図書文化社　月森久江編

例）形を構成できない（正確に書けない）→Ｐ．４２

漢字の偏とつくりのバランスが悪い→Ｐ．４６

・『発達障害のある子の困り感に寄りそう支援』学習研究社　佐藤　暁著

例）漢字を組み立てる十の画→Ｐ．７７

アイディア5

インターネットサイトを参考にする

漢字の書き順が動画で見られる。学年・教科書別になっている。なお、ひらがなやカタカナの筆順についても、次のサイトから見られるようになっている。

参考　『ひつじゅん君』　http://www.human.gr.jp/hitsujun/

＜取り組みを通して＞

・毎日、授業中に繰り返して練習する時間をとると、力がついてきた子がいる。家庭で学習する習慣が付いていない子もいるので、時間を確保することは大切だと感じた。

・鉛筆の持ち方をかえるだけで、スムーズな「書き」ができるようになった子もいた。

・鉛筆で書くのが苦手な子にとっては、机の上に指で書く学習法は受け入れられやすかった。

（４～５ページ　参照）

毛筆書写の準備・片づけが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・ことばのみの説明では、理解が不十分である。
・周りの友だちの様子から判断して行動することが多い。
・意見を求めても答えられることが少ない。
・元々整頓が苦手である。
・自分の物を大切にできない。

＜考えられる要因＞

・聴覚的な指示はイメージしにくく、理解できない。
・課題に対する経験が少なく、自信がない。
・順序立てて考えたり答えたりすることが苦手である。

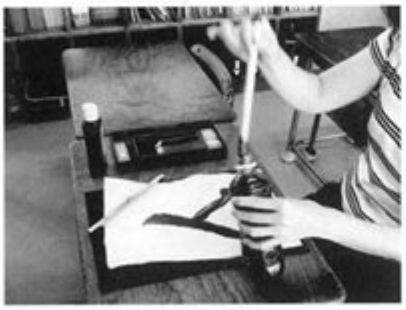
＜取り組みの実際＞

アイディア1

準備や片づけの工夫

・最初の指導で時間をかけて、手順表を黒板に貼り、一つ一つ確実にさせる。
(グループ、あるいはペアで片づけをして教え合う。)
・一人1本(ペットボトル)で筆洗いする。

※授業前にペットボトルに水を入れふたをして準備しておく。



※筆は自分のペットボトルで洗う。

※水を捨てた後のペットボトルは、教師が集めておく。

アイディア2

準備物を実物（見本）で、視覚的に提示する

・（ステップ１）机の前に準備できたものを置き、その通りに自分も準備する。もしくは、見本の下じきを作成して、下じきの上に実際に置いて準備する

・（ステップ２）できるようになれば机の横（左右）に置いて準備する。

・（ステップ３）周りの人より先に準備を始めるようにし、一人で準備を整える。

＜（ステップ２）右に置いて準備＞

アイディア3

つまずいている課題に気づく

・（ステップ１）準備や片づけの手順を示し、本人に実践させる。その際、墨汁の片づけ方や筆巻きの巻き方等、援助を求めた手順（つまずいている手順）を記録しておく。

・（ステップ２）援助を求めた手順を、繰り返し練習する。

・（ステップ３）授業の流れの中で実践する。

＜手順カード＞

※手順カードを使うことで、個別にも対応できる。

＜取り組みを通して＞

・ほとんどの子ができるようになった。

・アイデア２、ステップ２のようにしても、準備物の左右や、向きが逆になることもしばしばあり、その都度１ステップ戻ることで調節した。理解度を測る指標になった。

・一人でできるようになるまでの個人差は大きかった。一人でできるようになるまでは、周りを見ながら不安な様子だった。覚えてからの自信に溢れた表情で準備と片づけを済ませる様子とは対照的で、自信を深めることの重要さを感じた。

・手順違いで片づけ等を終わらせていることもあるが、全体での指導を行っているので、子ども同士で教え合ったり、伝え合ったりする場面も増えてきた。

時計をよむのが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・時間を守ることができない。
・「○時○分」という指示が通らない。
・時間行動は、所属集団や友だちの行動を見ながら行う。

＜考えられる要因＞

・アナログ時計をよむのが苦手である。
　　長い針と短い針の理解が困難である。
　　長い針の５、１０、１５…が困難である。

＜取り組みの実際＞

アイディア１

デジタル時計を活用する

・通常のアナログ時計の横にデジタル時計を置き、どちらでも見られるようにする。

＜デジタル時計・アナログ時計＞

アイディア2

通常の時計のふちに5、10、15…の数字を表示したシールをはる

・５、１０、１５…が定着してきたら、数字シールをとっていく。子どもの覚え方によって、５がつく数字を残したり、後の方が不確かな子どもは、定着したはじめの数字をとっていったりする。

アイディア3

時計学習ビデオ、教材時計の利用

・参考　『とけい・数えかた』Nikk映像（株）

・長針短針の指している数字をよめば時刻がわかる学習時計の活用。参考 くもん出版等

＜取り組みを通して＞

・時計をよむのが苦手な子どもも、デジタル時計→アナログ時計５、１０、１５…の数字つき→アナログ時計、と段階をふんで時計をよめるようになった。

・慣れてきたら、デジタル時計とアナログ時計の設置場所の間隔を広げていった。一方で時間を確認し、もう一方で再度確認することで、自信をもって行動できた。はじめは不安そうであったが、現在では、アナログ時計だけで時計をよめるようになった。

・５、１０、１５…の数字は、子どもの実態に合わせて取ることができる。複数の子どものためにシールをはっている場合は、子どもと相談してどうシールを取るかを決めた。

算数（十進法）が苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・繰り上がりのある足し算やくり下がりのある引き算が苦手である。
・計算をするときに、十のかたまりがわからない。
・大きな数や小数の操作ができない。

＜考えられる要因＞

・十の分解・合成が十分にできない。
・数の量感がない。
・十進位取法が理解できていない。
・生活の場面と結びついていない。
・抽象的なことを理解するのが苦手である。

＜取り組みの実際＞

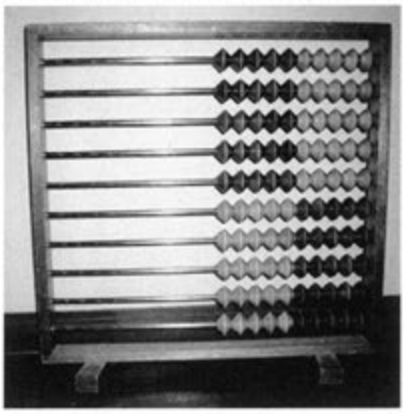
アイディア1

具体的な操作を多くし、スモールステップで教える

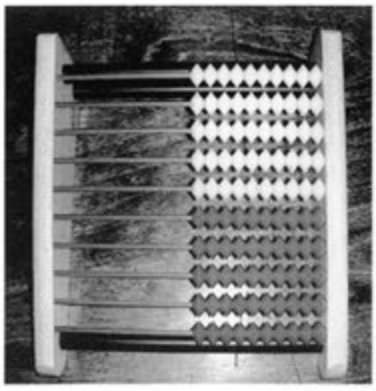
1　「数える」活動をする。
・実物（鉛筆やノート、色紙など）
・半具体物（おはじき、数え棒、マグネット式タイル）
2　「１０のかたまり」「１００のかたまり」を意識させる。
3　数字を書く。
・位取り記数法ができるようにする。

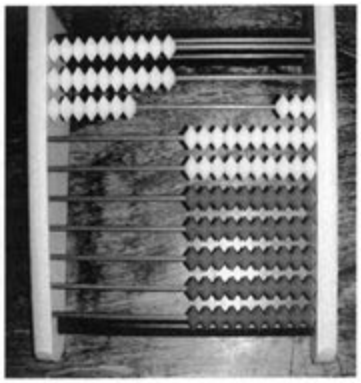
アイディア2

百玉そろばんで数を唱えさせる



＜教師用百玉そろばん＞





＜児童用百玉そろばん＞

参考　インターネットで「百玉そろばん」で検索すると、活用方法が出てくる。

アイディア3

書籍を参考にする

・『教室でできる特別支援教育のアイデア１７２　小学校編』　図書文化社　月森久江編
Ｐ．６２

例）立体の位取り板

階段状の「位取り板」を使い、視覚的なイメージを手がかりに、一の位と十の位の関係を量的に捉えさせる。

アイディア4

筆算の仕方をマスターさせる

・生活の中で、計算ができればよいと考え、暗算や横書きの式で計算できなくても、筆算のやり方を覚えさせ、活用させる。

アイディア5

計算機を使わせる

・アイデア４で述べたように考え，計算機の使い方を学習させる。

・計算の仕方を学習する単元でなければ（例えば、面積や体積を求める単元、文章題で考え方を学ぶ単元など)、計算機を使って子どもの負担を減らす。

＜取り組みを通して＞

・アイデア１の場合、一斉指導の場では難しく、別室での取り出し指導が必要だった。

・アイデア２の場合、用具が必要になるが、実際の操作ができるのでよかった。一斉指導で使える。物がバラバラにならないので扱いやすそうだった。また、一斉指導のなかで個別に使っているクラスもあった。その場合、「誰が使ってもいいよ」という教師の言葉があると、使いやすい。

・高学年になるにつれて、アイデア４やアイデア５のような考えが必要だ。ただし、特定の子だけが使うのではなく、誰でもが使えるという学級の雰囲気が大切である。

図工（図画）が苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・言葉で説明しただけでは、「どなにするん？」「何をしたらいいかわからん。」「意味わからん。」を連発する。
・「描きましょう。」と言ってから、取りかかるまでの時間が長い。
・画用紙の一部だけに小さい絵を描いて終わりになる。
・図工の時間になると不安気である。

＜考えられる要因＞

・表現の仕方（真っ白な画用紙に、何を、どこに、どのくらいの大きさで描いたらいいのか）がわからない。
・道具（水入れやパレットなど）の使い方がわかっていない。
・生活経験が浅く自信がない。
・話し言葉だけでは、理解がむずかしい。
・描く対象がひろすぎて、自分で選択できない。
・言葉の説明だけでは、イメージが描きにくい。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

指導の手順を細分化

・人の顔を描いた時の指導

1　鼻の穴を描く。

※まず、小さな物を描く。小さいから絵を描くのが苦手でも描ける。
この段階で全員をうんとほめる。絵を描くのが苦手な子も自信をもつ。

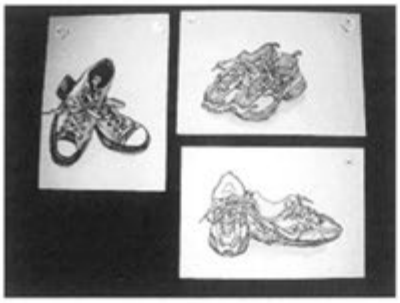
2　鼻を描く。

3　口を描く。　……のように

※描いていくうちに、画用紙からはみ出せば画用紙をはり足してあげる。

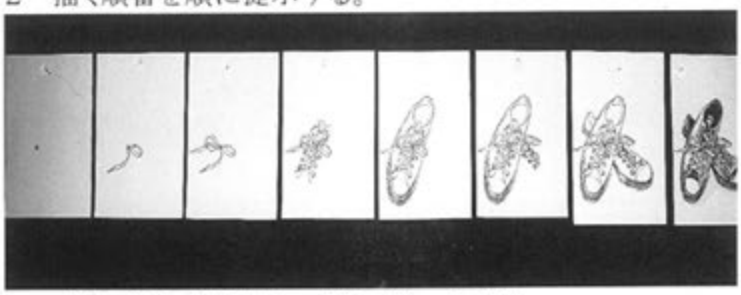
・くつを描いた時の指導

1　見本を提示する。



※最初に、ゴールとなる仕上がりのイメージをつかませる。

2　描く順番を順に提示する。



※右から順に貼り付ける。
絵の製作工程を巻き戻して見せることで驚きを持たせ意欲的に取り組ませることができる。

3　描き始めを指定し、隣へ隣へと描く。

アイディア2

絵の具セットの使い方指導

・絵の具を使用する最初の段階で絵の具セットの使い方を詳しく、ていねいに指導しておく。

例）水入れの使い方の指導

ア　ジャブジャブ池……使った筆をまずここでジャブジャブ洗う。

イ　サラサラ池……次にここでサラサラっとよくすすぐ。

ウ　スイスイ池……最後に筆の根本に残りやすい色を、スイスイすすぐ。

エ　とうめい池……ここの水は絵の具の一つ。

参考文献　『特別支援コーディネーターに必要な基本スキル』 明治図書　甲本卓司　編

アイディア3

人物の描き方指導

・人物のパーツをはさみで切り離し、それぞれのパーツを画用紙などに配置し、人物を組み立てる。

・絵を見て模写する練習を取り入れる。

＜取り組みを通して＞

・児童が描くことをいやがらず、学んだ描き方がその後の図工の時間にもいかされ、図工の時間を楽しむようになった。

・自分の作品が好きだと話し、大切にしている顔は、達成感いっぱいだった。

・描き始めを小さい部分からにすると、安心して描き始めることができた。

・画用紙が足りなくなると、はり足してもらえるという安心感があり、のびのびと描くようになった。

・仕上がりのイメージを持つことで、スムーズに進めることができた。

・絵の具セットの使い方がていねいになった。

家庭科（裁縫）が苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・作品が仕上がらない。
・わからないところ、できないところを言えず、作業が進まない。
・「先生、これ、どうするんですか。」「教えてください。」と、こと細かく質問を繰り返す。
・「わからん。」「もうせえへん。」「無理！！」と、投げ出す。

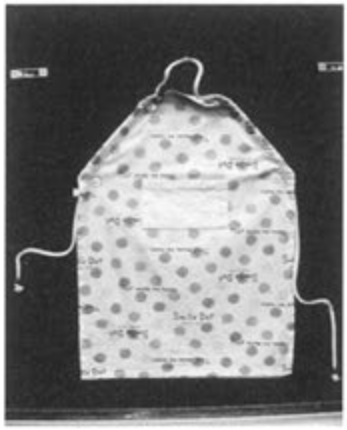
＜考えられる要因＞

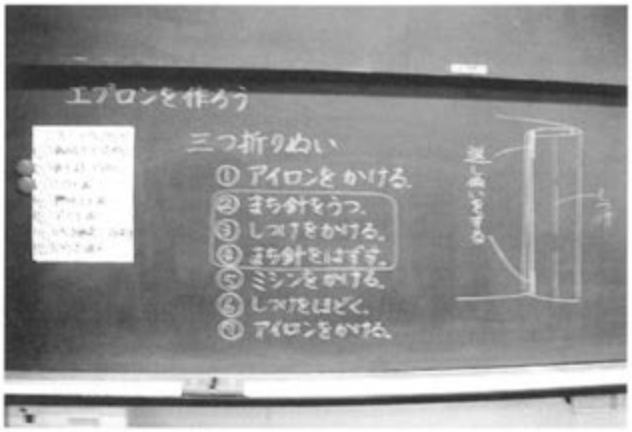
・説明を聞いていないので、やり方がわからない。
・技術的にむずかしい。
・教師と一緒にしたいと思っている。
・不安なので確かめずにはいられない。
・「できないかもしれない」と思うと、最初から受けつけられない。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

できあがりの作品の提示をし、その時間にすべきことを明確にする



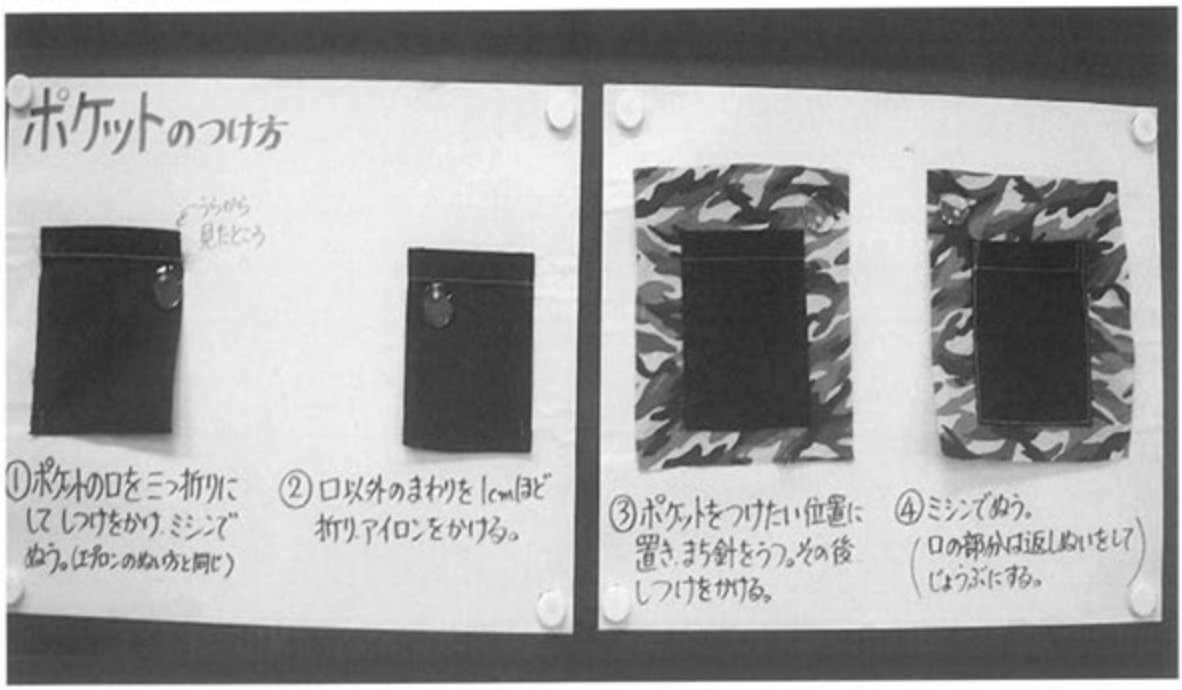


アイディア2

実演をする

アイディア3

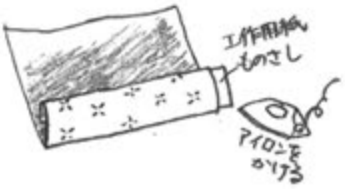
さわれる見本を提示する



アイディア4

専用のものさしを作る

・三つ折りのアイロンがけをするところでは、工作用紙で折りこみ幅４cmのものさしを作り（下図）、布に合わせて直接アイロンがけをする。



アイディア5

視聴覚機器やパソコンを使って、映像でやり方を繰り返し見られるようにする

＜取り組みを通して＞

・結局は一対一での指導が多くなるが、全体指導の方法次第で個別指導もしやすくなる。

・いろいろな子どもがいることを前提に授業を組み立てたり、物を準備したりすることで、全体指導で対応できる子どもたちが増える。すると、本当に個別指導が必要な子どもたちに対応できる時間が授業中に確保できる。

板書が見えにくい子どもには？（視覚的な解決）

＜学級・授業での様子＞

・教師が書いた板書を、ノートに写すことが難しい。
・ノートの写し方が順序だっていないが、書く意欲がある。
・色チョークの使用やカード、グラフ、地図などを掲示したときに混乱する。

＜考えられる要因＞

・色の区別がつきにくい。
・文字と線の区別がつきにくい。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

チョークの使い方の工夫

1　色覚対応型チョークに変える。

従来の色チョークに比べ発色が鮮明なチョークが販売されている。赤一色だけの対応ではなく、４色（朱赤/黄/青/緑）の色覚対応型チョークもある。

2　チョークの使用について

・白と黄を主体に使う。
・太めの文字や線で、大きく、はっきり書く。
・赤、緑、青、茶色などの暗い色は避ける。
・アンダーラインや囲みをつける。
・形状、輪郭線、模様、記号、文字など色以外の情報を加える。
・色分けをした区域には境界線を入れる。
・黒板上で採点・添削を行うときは、赤でなく黄色を使用する。

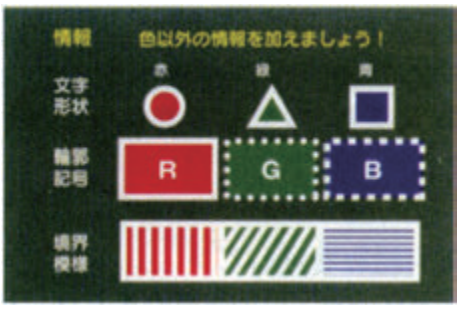
アイディア2

提示の配慮

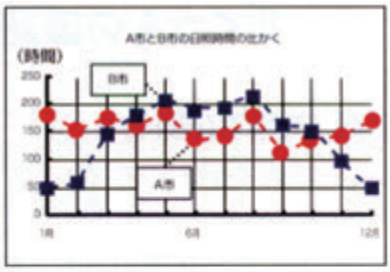
白黒で見てもコントラストがはっきりわかるようであれば、それは誰にでもわかる色の組合せである。

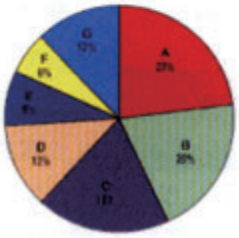
【グラフ・図表の提示】

・なるべく少ない種類の色で構成する。
・形、大きさ、模様、明暗などの色以外の情報を加える（右図）。



・境界をはっきりさせる。
・文字と背景の明暗のコントラストをはっきりさせる。
・暗い背景を使用する場合（黒板に直接グラフを書く場合など）は、明るい色を使用するとともに、異なった線種を使用し、マーカーは大きく、白で縁取りをする。
・折れ線グラフは、線は太く、実線と点線または太さなどを使い分け、マーカーはなるべく大きくする。また、色だけでなく形状も変える。
・円グラフ等は、明るく淡い色の組合せは避け、鮮やかな色を使用し、明るさの異なる色を組合せる。さらに模様など色以外の情報を加える。いずれも境界線を入れる。





【地図の提示】
・地図に使用されている色分けは言葉で説明する。（例：平地は黄緑色です。）
・地図では、さまざまな情報が色で表現されている。色覚異常の児童生徒には、その情報を読みとりにくい場合があることを理解しておく。
・白地図を色鉛筆で彩色する作業も難しいかもしれない。また、指示通りに塗り分けても、本人にはかえって見づらいものになることもある。本人の意思で色を分けるような指導を行うなどの柔軟な対応が必要である。また、斜線などの色以外の情報を加えることも必要である。

【実験・実習における提示】
・実験、観察、実習における色または色の変化は、色の名前を黒板に書き、野外観察などでは色の名前を言って示すようにする。
・色の変化の程度が判断できるように、文字で表現するなど工夫する。
・リトマス紙、ヨウ素液を用いたときの色変化は、あらかじめ黒板などに明示して、色の判別を補助する。
・植物の観察などでは、花などの位置と色を具体的に示す。正確に伝える。
・色覚異常の程度によっては、赤い花や実などが濃い緑の葉に紛れて見えにくかったり、土の中から発芽する様子が見えにくかったりすることがある。

参考 『色覚に関する指導の資料』 http://www.pref.osaka.jp/kyoishinko/hokentaiiku/hoken/sikikaku/sikikaku.pdf

＜取り組みを通して＞

・色覚異常の頻度は、報告者によって異なるが、およそ男子で５％、女子で０．２％といわれており、そのほとんどの人が赤緑色覚異常である。黒板の提示だけでなく広く配慮ができればいいと思った。
・体育でバトンを使用するときに、赤、青、緑の色の識別に役立つように白のテープで、それぞれちがったラインをいれて工夫したことは、効果があった。
・色覚対応のチョークは割高だが、支援が必要な子どもだけでなくすべての子どもにとって見やすいので、活用したい。
・赤チョークで丸を入れず、花丸カードを磁石でつけたり、矢印カードで注目させたりすることも有効だった。

たくさんの課題をするのが苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・一つの課題が終わったら、「あー終わった」と言いながら次時の予定を聞いてくることがある。
・自分の気になる問題から取り組み始めるが、時間が足りなくなってあきらめる。
・課題を理解できず、遊び出す。
・気持ちが不安定になっていることが多く、離席が目立つ。
・集中力がない。
・得意でない問題は取り組むのに消極的で、教師に委ねることが多い。
・一度間違うと、急に意欲が落ちてしまう場面が見受けられる。
・まちがい直しをすることに消極的である。

＜考えられる要因＞

・順序立てて話したり、説明したりするのが苦手である。
・課題量が多い。
・課題の解決方法の理解が十分ではない。
・ほかにしたいことがあるか、課題に取り組むのに抵抗がある。
・自信がなく、苦手意識がある。
・授業の流れが分かっていない。
・見通しが持てない。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

課題に取り組む順序を決める

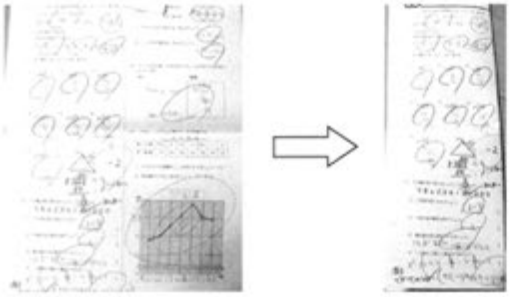
・１授業時間の中で、何から取り組むべきかスケジュールを作る。活動への見通しが持てるようにする。
・活動の量は変えずに、順番や時間は本人が決める。できれば、シールを貼っていく。決めたことには責任を持って取り組むよう促す。その際、難易度を調節し、最初は達成しやすい課題を持ってくるよう促すと、自信を持って取り組みやすい。
・最後は「ごほうび」になるような、ゲーム等の楽しい課題を設定する。
・しっかりほめ、達成感を味わえるようにする。

アイディア2

課題量を調節する

・テストであれば、上下（左右）の段で折り、半分にまず取り組む。できれば残り半分をする。目に直接見える課題の量を調節することで、意欲の減退を防ぐ。

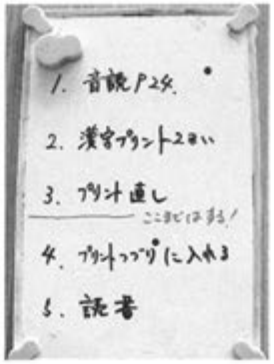
・課題量を調節し、確実に１つの課題を達成する。様子を見て量を減らす。



※全体に問題があるテスト用紙も、
半分に折れば量も半分に見える。

アイディア3

課題量・授業予定を提示する



・「早くできた人は○ページを読む」「さらにできた人は前に置いてあるプリントに取り組む」「○時○分まで取り組む」等、個人の学習ペースに応じて課題量を調節して示す。

・プリントなら「○枚」、音読なら「小段落の○段落まで」、教科書なら「○ページまで学習する」等、朝の会や授業の流れを板書等目に見える形で予告しておく。

・終わった課題については、黒板ならスケジュールを消す、プリントなら片付けさせる等して目の前から量が減ったことが分かるようにする。

・１つできたらシール等でがんばりを認める。

アイディア4

板書の中から、視写する内容を厳選する

・大事な所を囲み、板書を書き写す範囲を明示する。

・ワークシートを準備し、書く文字の量を減らす。

＜取り組みを通して＞

・すべきことと、終わったことが分かり、落ち着き、安心して取り組めるようになった。

・見通しを持つことができる上に、１つずつ課題を終えたという満足感と、シールを貼ることや最後のゲームが楽しくて、がんばることができるようになった。

・授業毎に課題量を示すことは難しいが、枚数や時間等、できるだけ具体的な数値を示すことで見通しがもてた。

・課題終了条件を明確にしておくと、「全力を出さずに手を抜いてしまう」ようなことがなく、効果的だった。

・１課題の時間を２０分単位にして課題を用意しておくこともできる。

・子どものシールが増えることで、周りの子どもにもメリットがあるような仕組みを作ることが大切である。

自分からやろうとしない子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・授業時、個人の学習場面において、一人では課題を解決できずにいる。
・周りの様子を見て、友だちにならって取り組もうとする。
・ごそごそしていることが多い。
・何に対しても取りかかりが遅く、作業が進まずにボーッとしている。
・口数が少なく、おとなしい。
・発表時には挙手するが、的を射た発言は少ない。
・教師がそばにつけば、取り組むことができる。

＜考えられる要因＞

・授業内容を理解できていない。
・何をしたら良いか取り組む方法が分からない。
・課題への優先順位が決められない。
・関心が低い。
・自信がない。
・きっかけがつかめない。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

全体指導時の配慮、意欲付けを行う

・机間指導時に短い間隔での指導を心がける。
・ノートなどの書き取りができていたらすぐに丸付けをする等、評価をこまめにする。
・声かけ、ほめる、自信をつける機会を増やすよう配慮する。
・問題文の中に、気になる子どもを登場させる形式で発問し、関心を高める。
・「できない」「分からない」際は、気を抜いてボーっとするのではなく、すぐ「教えてください」「見てください」等、適切な対応を伝え促す。今何をすべきかを知らせ、時間を有効に使えるようにする。

アイディア2

ルール作りをする

・忘れ物をした時には隣の人に借りる等、クラス共通のルールを決めておく。
・指導しやすく、励ましやすい座席配置となるよう工夫をする。
・グループで取り組む活動を設定し、友だちとのやりとりの中で理解を深められるようにする。
・ルールを学ぶ励ましとするため、シールやカードを貯め、様々な「ごほうび」（活動、物など）と交換できるようにする。

アイディア3

スモールステップでの教材作り

・一人でできる課題プリントを設定する。仕上がれば、次のステップへレベルアップという流れで、自信を持って取り組めるようにする。

・プリント1枚の問題量を調節し、枚数を増やす。その結果、何枚取り組んだか振り返る際、枚数が多ければ達成感が高まる。

・算数の計算機と同じように、電子辞書を使って分からない漢字を調べる。ゲーム感覚で速く調べられることが励みとなり、ローマ字に対する意識も高めることができる。将来的にも使用機会は多い。

・「くさかんむりがつく漢字」「漢字ビンゴ」等の学習を小グループで設定する。楽しく「知っている」「分かる」経験を増やし、自信をつける。

・市販の漢字ワークは分からない所もあるので、自分が使える漢字で「自作辞書」を作る。

・自分が、がんばったことを1行、一言でも書く「チャレンジ日記」を宿題にする。課題量としては少ないが、毎日同じことを書くということがなくなり、手伝い等の活動を探すようになって、書く意欲は高まる。

＜自作辞書＞

＜チャレンジ日記＞

参考文献　『思いっきり支援ツール』　エンパワメント研究所　武藏博文・高畑庄蔵　著

＜取り組みを通して＞

・全体指導時、特に低学年では、作文やノートの書き出しを支援することで、取り組めるようになったケースが多かった。

・「ごほうび」（活動、物など）が、積極的なルール理解や学習意欲向上に直結していた。

・自分で取り組んでみようという意欲を高めることが大切で、その過程で自信をつけると、活動自体を楽しみ、「ごほうび」（活動、物など）にこだわることがなかった。

・最初に小グループで練習をすることで、自信をつけさせることができた。

・聞き方やタイミングを理解することも、意欲付けとなることが分かった。

・課題内容や取り組み方が分かると、どの子も自分から学ぼうとする意欲は高まった。課題内容等は、本人の意向を確認しながら進めていく必要があった。

自分の思い通りにならないと攻撃的になる子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・ごそごそしていることが多い。
・「自分が、自分が」と主張して周りのことが考えられない。
・関心によって授業に参加する態度の差が大きい。
・思い通りにならない場合は、他に責任を転嫁させることが目立つ。
・周囲が関心を向けない素振りを見せると、行動がエスカレートする。
・自分に注意をした相手に対して、衝動的に攻撃する。

＜考えられる要因＞

・自尊感情が低く、感情や行動の抑制が困難である。
・注目を得たい。
・待つのが苦手である。
・物事を順序立てて説明したり、考えたりすることが苦手である。
・意欲はあるが、実力が伴わず、やる気がなくなってしまう。
・目標を高く設定する傾向があり、自分自身のことをまだ十分に把握しきれていない。

＜取り組みの実際＞

アイディア1

スモールステップでの活動を設定する

・目標達成のレベルを、細かく設定する。
・集中する時間、作業（学習）内容を簡単なものから難しいものへと少しずつ移行させる。

賞状（小）モノクロ
課題量（少）

賞状（中）カラー
課題量（中）

賞状（大）カラー
課題量（大）

アイディア2

ルールを設定する

・必ずしなければならない活動、守らなければならない約束事をカードに記入し、達成できた時には○をつける・シールを貼る・または消す、できなければ×をつける等、視覚的に自分で分かるようにする。

・保護者と連絡を取り合い、連絡帳にその日できたかどうかを伝える（シール、サインなど）。家でも、同じ観点でほめる、我慢させる、促す等を行う。また、家庭では連絡帳のコメントを子どもに読み、できた部分や保護者の気持ちを聞かせることで、共感する場を持つ。

＜約束がんばりカード＞

アイディア3

行動分析を行う

・トラブルの直前・行動・直後で記録を取り、分析することで考えられる原因を取り除き、望ましい行動を教えていく。

・危険なことが何かを普段から教えておく。

参考　『自閉症へのＡＢＡ入門　親と教師のためのガイド』　東京書籍　シーラ・リッチマン著

アイディア4

気持ちを整理する

・気持ちを落ち着かせる場所を用意する。

・学校全体で対処法について考え、共通理解を図る。

・イライラが募り、他へ攻撃する場面になった際は、静かに過ごせる場所へ連れていく。被害も最小限に抑えられ、周りの子どもの視線からも外すことができる。

・落ち着いたら話を聞く。次にどうすれば良かったかを必ず振り返るようにする。自分で投げた物や散らかした物はできる限り自分で片づけるようにする。

参考　『発達障害教育情報センター』　http://icedd.nise.go.jp/blog/

アイディア5

キーワードやカードで気持ちをコントロールする

・気持ちをコントロールするカードやキーワードを決めておく。

　例）「負けることもある。次がある」「負けるが勝ち」「我慢が偉い」

・同じような場面で教師が何回もそのカード、言葉を使う。

・カッとした時に自分に繰り返し言い聞かせることで、自分の状態に気づき、抑えられるよう取り組む。

参考文献　『教室でできる特別支援教育のアイデア172 小学校編』　図書文化　月森久江 編集

＜取り組みを通して＞

・ゲーム活動時にキーワードを使ってきたが、自分の思い通りにならない時でも、暴言が出なくなり、ゲームを楽しめるようになった。

・家庭との連携により、同じ行動をほめ、認め合うことで落ち着きが見られるようになった。特に、できた部分や保護者の気持ちも聞かせることが、大きな励ましとなった。

・担任以外の教師との連携を図ることで、教師も児童も問題行動への不安が緩和されることが多く、他の子どもの学習活動も保障される。

・「ごほうび」（活動、物など）の設定により、意欲が高まる、順序立てて取り組むことができるようになってきている。 周りの人の話にも耳を傾けるようになった。

視覚的な支援が有効な子どもには？

1. 口頭での指示がわかりにくい子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・口頭の指示を何回かしても、指示通りに活動できない。
・聞き返しが多いが、一生懸命に聞こうとしている。
・まわりが活動し始めると、友だちにならって活動を開始する。

＜考えられる要因＞

・「聞く」ことが苦手である。
・口頭での指示をすぐに理解できない。
・言われたことを忘れてしまう。

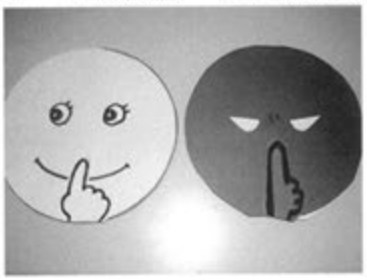
＜取り組みの実際＞

アイディア1

教師がカードで指示する

・指示とともにカードを提示する。
・その後は無言で子どもの近くでカードを提示する。または、黒板に掲示する。

カードの種類　（１０ｃｍ×７ｃｍ）



「しーっ」
左（表）：黄色　右（裏）：赤

左：「はなまるっ（Great!）」
右：「まるっ！（Good!）」

左：「ちょっと待った！」
右：「大きな声で」

左から
「始めます」
「あと５分」
「終わります」
「片づけ」

＜取り組みを通して＞

・カードの提示が面倒なときがあった。教師が使いこなしにくい。
・「しーっ」カードの黄色、赤の提示は有効であった。
・英語を書いてあると、それに対して興味があるので注目度が高い。
・カードで指示を与えるので、静かであった。

2. 口頭での意思表示が苦手な子どもには？

＜学級・授業での様子＞

・わからないのか、考えているのか、教師が把握しにくい。

・質問が少ない。

＜考えられる要因＞

・「わからなかったら手を挙げて」「聞いて」と言われても、質問することに抵抗がある。

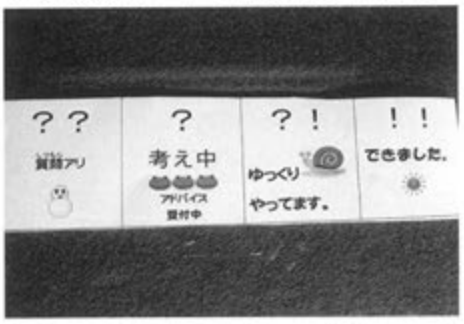
・考えるのに時間がかかる。

・考えている時間は話しかけられたくない。

＜取り組みの実際＞

アイディア2

子どもがカードで意思表示する



カードの種類

「？？質問アリ」

「？考え中」

「？！ゆっくりやってます。」

「！！できました。」

※４つのカードを折り自分の状態を表す面を出しておく。

活用方法

・カードの使い方を伝える。

　カードは机の右上に置く。

質問アリ・・・先生にわからないところを教えてもらう。 考え中・・・・アドバイス（ヒント）を受けることができる。 ゆっくりやってます。・・自分で考えることができる。 できました。・・評価してもらう。できている場合は次の課題をもらうこともできる。

・主に算数の授業中に活用する。

　教師の例題説明時や、自分で解く練習問題の時に活用する。

　教師はカードの内容を尊重することを伝える。

　「出し忘れかな？」と思ったときだけ確認することがある。

　教師は主に机間巡視しているときに見ていく。

＜取り組みを通して＞

・６学年の１学級全員で活用している。

・最初に「わかる」「わからない」の２択カードを使っていたこともあり、４択カードになっても使うことに抵抗はないようだ。使いこなせている。

・算数のＴＴの授業時に活用使用していたが、国語の作文指導時などにも活用できた。

・４択カードに「わからない」「できない」がないので、「やる」という意識づけになる。

・子どもの学習状態を把握できる。

・現在のサイズは折った状態で５ｃｍ×４ｃｍの西洋紙のカードだが、サイズや材質などは改良していきたい。

Ⅲ　通級指導教室

通級指導教室（わかば）と在籍学級との連携

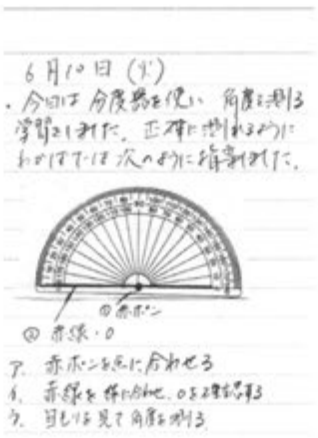
在籍学級担任と通級指導教室担当の連携は、子どもの力を伸ばす上でとても大事なものである。そこで通級指導教室からは、わかばで学習していることや子どもの様子（がんばったことから気になることまで）をその日のうちに担任に伝えるようにしている。また、在籍学級からは、子どもが授業でつまずいている箇所や生活面で困っていることを教えてもらっている。

＜連絡ノート＞

書くということで少し手間はかかるが、伝え忘れが少なく、その日のうちに伝えられる等の利点がある。ただし、在籍学級担任にはサインだけでもよいとお願いしている。

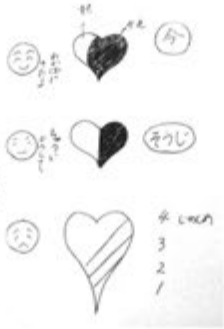
1　指導内容の連絡

ア　分度器



※わかばでの、「分度器指導はこのようにしています」と書いたもの。これを書く事で学級でもこの方法を使ってもらえるようになる。また、この方法が他の子どもにも適していることがあり、「今回は学級でもこの方法を使います」という場合もある。

イ　コミック会話



※朝、子どもが持ってきた在籍学級からの連絡ノートを見ると、朝の会でトラブルがあったらしく、朝の活動ができていないと書かれていた。そこで、学習をソーシャルスキルトレーニングに変更してコミック会話をしながら、どうしたら良かったのか考え、話し合い、コミック会話の内容を持ち帰らせたものである。

2　連絡事項

・予定変更や、持参物等も子どもに話してあるが、担任にも前もって知らせることで学級活動への参加がしやすくなったり、忘れ物が少なくなったりする。

・わかばでのがんばりを伝えたり、学級でのがんばりを知らせてもらったりすることで、子どものがんばりを認め、ほめる事ができ、同一歩調で進められる。

・在籍学級での学習内容を知らせてもらうことで、補充する必要のある箇所の指導ができる。

・在籍学級での行事や活動での役割を、前もって連絡してくれる。そこで、その準備を整えたり、練習したりすることができ、子どもが自信を持って行事や活動にのぞむことができる。

＜口頭＞

1　給食カウンターで

通級担当が、毎日給食準備時に給食カウンターにいるため、学級担任と必ず顔を合わす機会が持てる。そこで、その場所、時間を利用して短い時間ではあるがその日の様子を伝えることにしている。「がんばったわ。」の一言から、指導内容までさまざまであるが、連絡ノートを使っていない担任とはこの時間を有効に利用するようにしている。長くなるなと思った日にはメモを用意して手渡したり、放課後、学級訪問する約束をするなど、その日のうちに必ず連絡することを心がけている。

2　教室訪問

午後授業の子どもの場合は、給食カウンターでの話ができない。そこで、翌日の朝の会でほめてもらいたいと思うようながんばりを見つけたときには、その日のうちに教室や学年室を訪問している。

3　来室

・在籍学級での出来事になるが、一般的には当たり前のことであっても、通級児童にとってはすばらしい出来事であり成長だと、担任には思えることがある。しかし、この出来事も担任以外には普通のことだととらえられ、喜びを共有できないことがある。そんなときに、この子どもを理解している通級教室担当となら喜びを共有できると来室してくれる。

・通級児童の中には、予想していなかったような行動をとる子どももいる。そんな時には、その子どもに対してだけの個別の指導が必要になってくる場合がある。在籍学級担任は在籍学級で、もちろん指導をするが、通級教室でも指導して欲しいと、詳しく状況説明するために来室することも多い。

・保護者からの連絡に対して、一緒に考えてほしいということでの来室もある。

通級指導教室（まなび）と保護者との連携

保護者の希望により、通級指導教室（まなび）で学習していることを保護者に伝えるようにしている。伝える内容は、学習内容、その時間の子どもの様子、連絡事項などである。方法は連絡ノートまたは送迎時に保護者に直接話す等である。ここでは、連絡ノートを使った方法について紹介する。

＜出席カレンダー＞

＜連絡ノートの受けわたし＞

1　出席表に来室時刻を記入する。
2　出席カレンダーにシールをはり、通級で指導があったかどうか保護者に分かるようにする。
3　子どもが連絡ノートを担当にわたす。
（ノートの向きに注意し両手でわたす。「お願いします」を必ず言う。）
4　記入は子どもが通級教室にいる間にする。
5　教室に帰るときに子どもに連絡ノートをわたす。書くことが多くて渡せないときには、下校に間に合うように、子どもまたは学級担任にわたす。
6　学級に帰って子どもが担任にわたす。
7　担任もチェックし、必要に応じて記入する。

＜連絡ノート＞

＜連絡ノートの内容１　ソーシャルスキルトレーニングの記録＞

【目的】

ソーシャルスキルトレーニングの学習をした場合、学級、家庭でもその内容を確認し共通理解して、指導できるようにする。

【方法】

その時間内に学習したルール、ゲーム、ソーシャルストーリーやコミック会話などをノートに記入する。

＜連絡ノート＞
左：ソーシャルストーリー
右：コミック会話

【取り組みを通して】

同じような指導が必要になったとき、そのページを見せて指導したり、内容をバージョンアップして指導したりすることができる。指導回数や達成シールの数で子どもの実態把握ができ、今後の指導に生かすことができる。

＜連絡ノートの内容２　学習方法の確認＞

【目的】

習得しにくい学習内容について、通級指導教室でどのように指導したか、その方法を知らせる。

【取り組みを通して】

家庭で学習するときに学習方法が同じである方が子どもにとって理解、定着しやすかった。

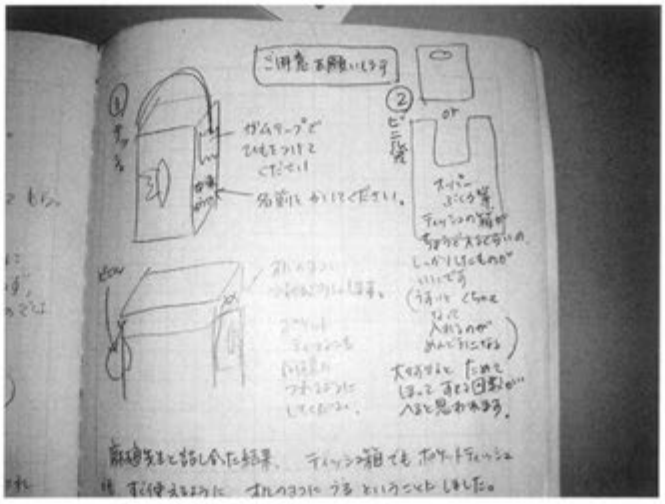
＜連絡ノートの内容３　子どもへの支援提案＞

【目的】

筆箱の管理の仕方、マイティッシュの用意、水さい絵の具セット利用方法など、学校生活のなかで支援の方法を変えたり、家庭の協力が必要なときに、記入する。家族の協力と理解が得られ、支援を受けやすい。

【方法】

ことばだけの説明でなく図解して示すなどの工夫している。



＜連絡ノート＞
マイティッシュの説明

【取り組みを通して】

連絡ノートを通じて、その支援が有効であったか、改善点は何かについて連携をとりながら支援を進めることができた。

＜保護者との連携、成果と課題＞

・家庭での子どもの様子がわかり、指導の手がかりが得られる。
・支援の内容、方法を伝えることで、保護者の理解、協力を得られやすい。
・自由記述なので、記述内容が少なかったり多かったりする。適宜、必要な内容を書いている。形式を作ると連絡ノートが義務的に感じられ、負担になるようだ。保護者の思いやペースを大切にし、形式については話し合ってそれぞれ決めたほうがよいと感じた。
・連絡ノートを希望しない、また継続して連絡ノートを受けわたしすることが難しい保護者もいる。担任と連携をとり、担任から連絡してもらったり、その日に学習したプリントの後ろに連絡事項を書いたりしている。
・高学年になると、連絡ノートの内容を子どもが気にするようになってくることもある。本人に知らせたくない内容を書くことも難しい。メールや、ＦＡＸの利用を考えている。

Ⅳ　おわりに

今回の特別支援教育調査研究ワーキングでは、小学校の先生方に協力していただき、昨年度に続いて、通常の学級における授業や学級経営の中でできる指導や支援の方法および通級指導教室における連携について実践研究を行った。半年余りの実践を通して、先生方が改めて気づいたことや感じたことは、次のとおりである。

○平成１９年度の冊子を見たときに「いいなあ、これは役に立つ」と思ったのだが、実際に自分がこの冊子作りにかかわるとなった時に「大変だ。これ以上にどんな事例？どんな支援？」との思いがよぎったのも事実である。しかし、支援の必要な児童の様子や教科について話し合いを始めると、たくさんの事例が出てくるだけでなく、他の学校でも同じような支援を必要としていることがわかった。

どんな支援があるのかなあではなくて、ひょっとして、これはこの子に使える方法かも…という意識が常に働くようになった。ひとりでは気がつかなかった事も話し合う中で支援の方法が見えてきた。そこで、私の周りにいる人たちとも、たくさん話し合い、教えてもらうことが必要だと考え、声をかけていった。すると、支援の方法を考えるだけでなく、子どもの姿を改めて見つめ直す事ができた気がする。

今回、この実践研究をしていく中で、たくさんの先生方から子どもたちに向かう姿勢を学ばせていただいた。また、どんな支援があるのかという姿勢を、私自身が持ち続けていくことが大切なのだと学んだ。これからも子どもたちみんなが笑顔で学べるように、どの子にも使える支援を探していきたいと思っている。

○今回の実践は、周りの先生から教えていただいたアイデアであり、私自身たくさん学ばせていただいた。実践されている支援の方法は、本当にたくさんあると実感し、自分自身の勉強不足も実感した。

今回特に感じたのは、子ども同士で学び合うこと、励まし合うことの大切さだ。仲間は、子どもたちにとって最も身近で、親しみの持てる存在であり、支えともなる大事な存在だということだ。支援、指導を行う際にも、時には子どもの目線となり、意識していかなければならないポイントだと思っている。

先生方のアイデアにより「学びやすさ」が増し、子どもたちの学習環境がより良くなって欲しいと願っている。と同時に、子どもにとってより良い支援をつなぐために、自分自身も学び続ける姿勢を持ち、実践を行いたいと思っている。

ご協力、ご指導いただいた先生方、ありがとうございました。

○子どもたちの日頃の様子をどれだけ見ているか、そして、苦手なことや不得意なことに対して、どれだけの手だてができているのか、反省するきっかけとなった。

ほかの先生方に情報をいただいたり、協力していただいたりして、事例を集めること

ができた。それぞれの先生方の取り組みについて話し合い、いろいろなアイデアをいただくことができ、「学校のあの子に合うかもしれない」「今度ためしてみよう」という思いでいっぱいになった。

同僚にも声をかけ、いろいろな手だてを聞かせていただいたり、実際に子どもたちに使ってみたりした。うまくいったケースは、子どもたちの笑顔が見られ、改めて、子どもたちは「わかるようになりたい」「できるようになりたい」と思っていることを感じた。うまくいかないことも多いが、少しでも子どもの思いに寄り添えるよう、今後も研究を続けたいと思う。

ご指導いただいた先生方、ありがとうございました。

○通常の学級の中で、どんな支援ができるのか？をテーマに、たくさんの先生方のご協力をいただいて研修できたことに感謝している。本当に勉強になった。

ここにあるアイデアは、ユニバーサルデザインのように、支援を必要としている子どもを、そうでない子どもを、助けることができる。

また、今回チームで話し合いながら作業を進めることが、とても心強く、また得るものが多かったと感じた。学校現場は忙しく、実際に効果ある実践をしていても、それについて話し合ったり、文章化する時間がなかったりする。この機会に話し合い、文章化できたことがとてもよかった。

今年度は、このように子どもたちの「わかるようになりたい」「できるようになりたい」という気持ちに応えられるように実践研究を重ねてきた。

本研究のさまざまな手立てが、特別支援教育の実践に活用され、特別な支援の必要な子どものみならず、すべての子どもたちの学びやすさにつながることを期待している。

徳島市特別支援教育調査研究ワーキンググループ

子どもにとってよりよい支援をつなぐために
～通常の学級でできる指導・支援事例集～
PART Ⅱ

発行日：２００９年３月
発行者：徳島市教育委員会
徳島市幸町２丁目５番地
電話　０８８－６２１－５４１２
編集者：特別支援教育ワーキンググループ委員